

人間学は多様であってよい」、「総合人間学は例えば地球環境問題など具体的な社会問題との格闘を通じて達成される」とする考え方が確認できる。これらは「設立趣意 (2006)」や「学会趣意 (2019)」にも通じる考え方だと理解される。そうした種々の視点を踏まえて、人間の自然性、社会性、文化・精神性などを相互連関的に描き出すと同時に、知のあり方 (専門知、分析知、臨床知、実践知、総合知、暗黙知など) への理解を通して、人間の全体像、全体知に接近していくことが、さらなる重要性を増してきたように思われる。

.....

本文例 (Texts)

総合人間学試論・私論 (Essays on Synthetic Anthropology)

総合人間学における知の構造について

On the Structure of Knowledge in Synthetic Anthropology

上柿崇英 (環境哲学／現代人間学)

UEGAKI Takahide (Environmental Philosophy / Contemporary Human Studies)

1. 総合人間学の目的と存在意義

総合人間学会の「設立趣意」によれば、総合人間学の目的とは、自国中心主義やエゴイズムの蔓延、自らの破滅を招きかねない大量破壊兵器や環境危機、情報化や生命操作技術を含む科学技術がもたらす未知の現実といった数多の世界問題、そして文明そのものがターニングポイントを迎えた時代において、「自分がどこから来てどこへ行く存在であるか。人間たる自分は何者であり、どう生きるべきか」を改めて問うこと、「人間を全体として見直し、文明のありようを根底から再検討する」ために、新たな知の創造を試みていくことにある、とされる。とりわけ今日の学知は細分化をきわめ、学知そのものは増大するなか、そうした事態の中心に位置するはずの「人間の本質はむしろ蓋い隠され」、「皮肉にも人間の統一的把握はいっそう困難になって」いる現状があるという。したがって、こうした学知のあり方の克服を試みていくことが、**人間学の存在意義**であると言いうことができるだろう。

2. 総合人間学における学知の構造

われわれが上記の目的を達成していくためには、「知の創造」をめぐる①新しい「学知の枠組み」と②新しい「方法論」が求められるだろう。まずは、総合人間学に求められる「学知の枠組み」について考えてみたい。前述のように、これまでの学知は、科学的な検証と実証性を重んじるあまり、細分化し、特定の専門領域に閉じたものになりがちであった。それを仮に「専門知（個別知）」と呼ぶのであれば、総合人間学に求められる学知とは、こうした「専門知」を超えるものにならなければならないだろう。とはいえ、そうした学知を具体化していくためには、いくつかの異なる知の次元をあらかじめ設定しておく必要があると思われる。ここではそれを便宜上、「全体知」、「総合知」、「実践知」、「非明示的な知」という形で整理し、説明することを試みたい。

1) 「全体知」

まず「全体知」とは、「設立趣意」にある「人間と世界の全体像」、ないしは「全体としての人間の総合認識」を直接的に志向する知のあり方であり、例えば物質（宇宙）、生命（生物界）、精神（人間）といった、マクロな視点からミクロな視点に至るまでを包含できるような総合理論などがこれに相当する。

2) 「総合知」

ただし、そうした「全体知」的な総合理論の開発は容易ではなく、またそうした「究極の理論」は存在しないとの立場もある。そこで登場するのが、「総合知」である。「総合知」とは、複数の「専門知」によって創発される学際知のことを指し、例えば異なる「専門知」の比較／組み合わせのなかから形成される「関係知」や、異なる「専門知」のシナジーによって形成される「創造知」などもこれに含まれる。

注意を要するのは、複数の「専門知」を持ち寄るだけでは「総合知」とは言えないということである。あくまで「専門知」を超えた学知の創造があって、はじめてそれは「総合知」と呼びうるものになる。また、あくまで総合人間学である以上、「総合知」は、人間存在の本質を理解することに関わるものであることが望ましい。

3) 「実践知」

「設立趣意」にもあるように、総合人間学の目的のひとつは、世界問題を含む現実社会の問題に何らかの形で寄与していくことが含まれている。そこで登場するのが、机上の理論にとどまらない「実践知」である。「実践知」とは、具体的な問題や現場を志向する「総合知」の一形態であり、例えば特定の問題の現場からボトムアップの形でもたらされる「臨床知」などはこれにあたる。

4) 「非明示的な知」

さらに、上記に収まらない学知の形態として、「非明示的な知」というものも想定できる。

これは、学知という形でこれまで十分に捉えられてこなかった知識を、改めて「総合知」として再編したものを指しており、例えば「暗黙知」と呼ばれる知の次元の発掘、芸術や宗教に関わる知の次元の発掘などがこれに相当する。

3. 総合人間学における総合の方法

総合人間学においては、以上の四つの学知の次元を開発し、新しい学知の創出を行っていくのが望ましいだろう。しかしそのためには、新しい「知の枠組み」に相応しい、新たな「方法論」が必要となると思われる。例えば前述のように、学知の基準を特定の「専門知」のルール（規律）にのみ求めることは避けなければならない、学知の水準として仮説・分析・実証の手続き的な正しさ（科学的実証性）のみを求めることも避けなければならない。また前述のように、「専門知」を持ち寄るだけでは総合人間学を実践したことにはならないため、この点をいかに乗り越えるのかということが重要なポイントとなるだろう。ここでは上記の「知の枠組み」に沿いながら、「方法論」の要点となることについて考えてみたい。

1) 「全体知」の方法論

「全体知」を創出するためには、おそらく「全体としての人間の総合認識」を可能とする総合理論（統一理論）を開発するための特別チームを発足させ、試行錯誤を繰り返していく必要がある。ポイントは、メンバーに統一理論を構想する強い意志が共有されていることであり、そこでは統一理論としての精度を向上させるために、仮説・分析・実証といった手続的な正しさ（科学的実証性）が重視されることになるだろう。

2) 「総合知」の方法論

これに対して「総合知」は、必ずしも「全体としての人間の総合認識」を目指すわけではなく、人間存在の特定の側面、人間に関わる特定の問い／対象／事象を中心軸としながら、それに関心のある研究者がチームを組織することで実践される。そこで単なる「専門知」の持ち寄りという状態から一歩前進するためには、メンバーがオリジナルの理論（共有可能な体系的な「言語装置」とも言える）を構想していく必要がある。その理論＝「言語装置」は、既存のものを深化させる形でも、また新たにゼロから構築する形でもかまわない。なお、筆者が提案した「中間理論」とは、こうした「総合知」の理論化について説明したものである。

3) 「実践知」の方法論

「実践知」は、「総合知」のなかでも特定の問題や現場と強く結びついたものである。そのため、メンバーは中心となるべき問題や現場に深くかかわる形で組織される。ポイントとなるのは、問題の現場からもたらされる事実を単に報告、記録するだけにとどまらず、いかにしてそれを理論化することができるのかという点であるだろう。問題の現場に近い分、理論化が不十分であっても成果に結びつくといえるが、総合人間学として「実践知」を創出する

ためには、やはり理論化が求められると言える。

4) 「非明示的な知」の方法論

「非明示的な知」の場合は、現実的には、①人間存在の特定の側面、人間に関わる特定の問い／対象／事象を中心軸として形成される特定の「総合知」の実践を通じて開発されるか、あるいは②「非明示的な知」を開発することを目的とした特別チームによって行われるだろう。ポイントとなるのは、これまで学問的とは見なされてこなかった知見や事象をいかにして「総合知」の理論として昇華させるのかという点であると思われる。おそらく具体的な方法論の深化が最も問われる領域だろう。

以上、総合人間学の目的と存在意義からはじめ、総合人間学における「知の枠組み」や「方法論」について考察してきた。ここで取り上げてきた「全体知」、「総合知」、「実践知」、「非明示的な知」について、そのいずれかが総合人間学として最も重要であるということはないだろう。おそらくそのいずれもが重要であり、同時に、これらをすべて同じ研究者が引き受けることは不可能である。総合人間学を前進させていくためには、いずれもそれぞれの課題に特化したチームが必要であり、それぞれのチームで「理論化」をどれだけ進められるのか鍵であると言えると思われる。

《参考文献》

- 穴見慎一 (2017) 「学会創立 10 周年記念フォーラム」のための弁明 — 今後の 10 年に向けて」、『総合人間学研究』、第 11 号、pp. 3-15
- 穴見慎一 (2020) 「『総合知』と『全体知』 — 私たち (本学会) は何を知らうとしているのか?」、『総合人間学研究』、第 14 号、pp. 69-81
- 上柿崇英 (2017) 「総合人間学と『中間理論』の方法論 — 総合人間学会「創立 10 周年記念フォーラム」をうけて」、『総合人間学研究』、第 11 号、pp.16-32
- 大倉茂 (2017) 「若手シンポジウムの実践から〈総合〉を考える — 問いの共有と総合人間学史の構築」、『総合人間学研究』、第 11 号、pp. 43-50
- 長谷場健 (2017) 「総合人間学の方法論試論 — 「人間の自律」をキーワードとして」、『総合人間学研究』、第 11 号、pp. 33-42

総合人間学の条件

A Condition of Synthetic Anthropology

穴見慎一 (環境思想)

ANAMI Shinichi (Environmental Philosophy)

「総合 (総合人間学) は多様であってよい。」これは、2006 年の本学会設立以来、会員間で培われてきた総合人間学の方法論に関する一つの共通認識である。確かにそれは、決して否